

「哲学の道 その壺」

明星学園 宮下 智

「嘔みつき」の意味を教えてくれたのは彼だった。激しい「ジャンピング」や「裸」や「薄着」の意味を教えてくれたのも彼だった。さらに「長男の苦しみ」を抱えながら、「父を越え、母から抜け出し」、「自分らしく生きる」ことの意味を教えてくれたのも彼だった。彼は、二十五年前の入所以来、いつでも私たちの先生で、そして哲学する人だった。

日がなベットの上やプレールームを見渡せる棚の上で、何やら考え深そうにしてパンツ一丁と肌着で時間を過ごした。時にプレールームに飛び出すと隅から隅まで跳ね回って失尿をして、あげくは嘔みついた。

思い出すのは、動作法の場面だ。「腕上げるよ」の支援者の声に「ウッ」と頷きと同意の声、ところが腕上げを始めた途端、床にはオシッコの海ができた。失尿は話すことができない彼の「イヤだ」のおしゃべりだった。

入所して間もない小学部高学年の頃、養護学校でも、明星でも彼は良くトランポリンを跳んだ。一時間でも二時間でもトランポリンを跳び、ジャンプの高さは一メートルを越え、手は天井につかんばかりだった。もちろん日常的にジャンプすることが多かった彼に良かれと思って与えられたトランポリンの時間だったが、大好きなはずのその場所で彼は嘔吐し、「ウォー」と大声を出した。その頃、嘔吐は多飲、多食のせいにされ、大声は喜びの興奮に原因が求められた。今から思えば、それはとんでもない間違いだったが、その頃の私たちにはそれが精一杯だった。ストレス発散だなんて言って…ネ。非行少年がバイクを走らせることにしか怒りのエネルギーの向け方がわからないように、彼にはジャンプすることしか人生の処方箋が無かったに過ぎなかったのだ。嘔吐も大声も彼の吐き出せない苦しい想いが、形を変えて吐き出されていたのに違いない。

彼の実家はお寺である。そして彼は、長男、しかも一人っ子、当然のようにお寺を継ぐのが宿命である。しかし、重度の知的障がいと自閉症の彼がお寺を継ぐのは至難の業だ。父も母も、そしてもちろん本人が、一番それに苦しんだに違いない。幼い頃から「この子が普通だったらねえ」とか「この子に障がいが無かったらねえ」のような心無い言葉が無神経に注がれたに違いない。入所理由は「この子がいて、お寺の仕事がきちんとすることができますか？」という檀家さんからの言葉だった。入所は彼に下されたお寺の跡取りには不適格であるという烙印だった。

父も母も一生懸命の人だ。そして子煩悩だ。入所以来、どんなにお寺で忙しくても、いつでも彼の帰省について心を砕いてくれる。帰省すれば本堂を跳ね回り、お供え物に手が出て、失尿を繰り返し、夜ほとんど寝ない彼であっても、我が子として愛情を注ぎ込み続けてくれた。

帰省すると父は良くドライブに連れて行ってくれた。そして食堂に立ち寄りともに食事をとった。父のお好みのメニューはカツ丼、彼も「カツ丼で良いか？」の父の問いかけに「ウッ」と頷いてカツ丼を注文し食べた。そんな帰省の後、彼は必ず跳びはね、失尿をし、壁に頭突きをゴンゴン繰り返し、眠ることができなかった。そして眠れない夜にはカントリー音楽を聞いた。

お寺を継げない自分に強い負い目を感じている彼ができることは、両親に自分を認めてもらうお寺以外の別の方法を見つけることだった。カツ丼は父の好物、カントリー音楽は、いつも父親が聞いている大好きな音楽ジャンル、そしてドライブは父親が提案してくれる帰省中の一人息子への最高のもてなしの方法だ。

彼は、父の好きな物を同じように好きになることで、また父の編み出したもてなしの方法を快く受け入れることで、父に認められる道を選んだのだ。が、それは結果として彼に不穏行動を生起させることになった。

「カツ丼、どうかなあ？お父さんと同じものを注文することで、お父さんに喜んでもらおうと思っているんじゃないかと思うけど、カツ丼、好きじゃないでしょ。学園での食事を見ているとわかるよ。ちゃんと自分の好きな物を頼めることの方が、お父さんに、お前も立派になったなあ、と喜んでもらえると思うけど、そう思わない？父親って自分の息子が自分の主張をきちんと持つことができるようになっていくのを見るのが実は喜びなんだよ」「お蕎麦、好きだよ。お父さんはカツ丼、君はお蕎麦、次からそれで行こう。お迎えの時にしっかり頼もうね。そんなことで嫌われないって！自信をもって生きようぜ！」

こうして彼は、一步一步父を越えていく。「ドライブ、実はあんまり好きじゃないんだ」「たったの一泊二日の帰省なんだから、帰省の時くらいはお寺の用事を入れなくて欲しいな」「お寺のこと、帰省できないときの理由、突然の用事の理由、ちゃんと話して欲しいな」「僕がたとえ間違っただけをした時にも頭ごなしに怒らないでよ。僕には僕の理由があるんだから。ましてやゴチンなんかはもってのほかだよ」一歩、越えるごとに彼には穏やかさが訪れた。

母にはこうだ。おやつの買い物でたびたび彼は、プリンやピザを買った。そして食べて吐いた。確認すれば、それは母親の大好物だった。父親に対するのと同じように同じものを好きになることで母親に喜ばれようとしていたのだ。そしてクラシック音楽を聞いた。これは声楽家の母を直接連想させた。

「お母さんの好きそうなものを買おうとした時には止めさせてもらおうよ。君の好きなおやつは、ポテトチップスでしょ、それにサイダーでしょ。本当に好きな物を食べている君のことがお母さんはきっと好きだと思うよ。他にも嫌いなものいっぱいあるよね。シューマイでしょ、餃子でしょ…、この際、みんなお母さんに伝えちゃおう！学園でも残してます！って」母からそのことを認められるごとに、母への思いやりが芽生えてくる彼だった。足の痛いお母さんに運動会の競技と一緒に出なくてもいいよ、ゴールテープのところで待っていて、僕を応援して下さい、と伝えたのがこの頃だ。母もこんな時に「えっ！どうして？」とは言わない。いつでも「わかったよ、ありがとうね」と必ず快諾してくれる。

その年、彼には毎日のように不穏が続いた。特に壁への頭突きと大声、そして前頭部から頭頂部へと続く抜毛だった。ヘアスタイルはお寺出身らしく幼い頃からの坊主頭だったから、抜毛は、長髪に比べてかなり困難なことだったろうが、見事にツルツルに髪の毛が無くなった。答えが見つからぬまま数ヶ月が過ぎた。

支援は困難を極めた。しかし、これまでに彼が歩いてきた道を振り返り、これから歩いていく道を考えた時、おぼろげながらたどり着いた本当の気持ちは、次のようなものだった。

「僕はもうお寺は継がない、継ぐことができない自分をお父さん、お母さんに認めてもらおう。僕は明星学園で幸せな道を探すことに決めたんだ。だから僕は髪の毛を伸ばす！」

お寺の長男、一人っ子、後継ぎという宿命を背負い生まれてきた彼、三十年近くの月日を経て、その呪縛から解き離れて自分らしい生き方を探し求めている彼。そこに知的障がいも自閉症もない。彼の頭の中は、今まで歩いてきた道、これから歩いていく道、いつでも人生のことでいっぱいだ。父のこと、母のこと、徐々に衰えていく姿、そして今の自分にできること、ベッドの上で何もしていないように見える彼の頭の中は、思いやり、やさしさと表現できるような利他的な想いが四六時中巡っている。

彼は、その頃、カントリー音楽もクラシック音楽も聞かず、一青窈の「ハナミズキ」をどこからCDを探してきたのか繰り返し聞いた。

♪～僕の我慢がいつか実を結び 果てない波がちゃんと止まりますように 君の好きな人が百年続きますように～♪

聞けば、お寺の境内に彼が生まれた時に元気に育つようにと記念に植えたのが「ハナミズキ」というのだ。

父親のようなお寺の住職の仕事、宗教家の仕事が人生のことを深く考えることであるのなら、彼はお寺を継がないと言いながら、実際の人生の中身は父親と同じ姿を求め、そして越えていく道を歩いているのではないかと思うことがある。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>